「人と電気のエネルギー」

中学二年　Ｔ・Ｋ

私はこの夏休みに、某生協主催の発電産地ツアーに参加した。

その発電産地というのは、福島県の土湯温泉町と飯館村だった。

飯館村は福島第一原子力発電所の事故を受け、去年まで避難指示が出ていた村だった。私がそのツアーに参加したのは終戦記念日の後だったため、つい先日まで原爆の被ばく者の話などが連日ニュースで流れているような時期だった。原爆と原子力は威力が違っても同じように被ばくする訳だから、私も最悪被ばくして死んでしまうのではないか、という今考えれば大げさな恐怖を抱きながら東京から福島に向かった。

これまで私は何度も福島に訪れているが、飯館村のように長らく避難指示が出されていたようなところではなく、人もたくさんいた場所だったので今回のような恐怖を感じるようなことはなかった。だがやはり、東京の原っぱでのように地面に直接大の字になってゴロゴロする、などということはあまりしたくなかった。

福島駅に着いてバスターミナルを見回してみたが、旅館のマイクロバスが何台もあり、大型のスーパーはあるがコンビニはない、といったいつもと変わらない、見慣れた福島県がそこにあった。だが私が今呼吸をしているこの街には東京の何倍もの濃度の放射性物質が飛び交い街の何もかもを汚染していく、と思うと、見慣れた街並みがいっきに怖くなった。

旅館のバスに乗っていても観光をしていても、あちこちに放射線物質を計量する機械が置いてあり、電光掲示板がその数値を示していた。私はどの数値まで安全なのか、というようなことはわからなかったので数値はただ眺めているだけだった。だが、数値があらわす危険性を知りもしないのにこんなに数が大きければすぐに被ばくして死んでしまうのではないか、と自分の心の中で事実無根な物語を繰り広げていた。

土湯温泉町には、名前の通り温泉がある。東日本大震災の前までは年間約二千万人の観光客が来ていたが、震災後は激減し年間四百万人にも下がった年があった。その影響で飯館村にあった五軒の旅館が閉店を余儀なくされた。観光客は減り、家にも帰れず、仕事もない。そんな状況を克服したのが発電だった。福島の原発で事故が起きたばかりなのに同じ福島で発電をするなんて、と思った人もいて当然である。私も初めにそのことを聞いたとき、事故の教訓を忘れてしまったのか、と思った。だが飯館村の発電は、原子力ではなく、火力でもなく、再生可能エネルギーを使用した発電だった。最近よく耳にするようになった「再生可能エネルギー」とは一体何なのか？色々調べてみた結果、再生可能エネルギーというのは無限に使えるエネルギーだということが分かった。例えば、火力発電は石炭や石油を燃やしてその蒸気で発電をするというものであるが、石油も石炭もいつかは尽きてしまう。一方、再生可能エネルギーは身近なものだと太陽光発電や風力発電といった自然の力を利用したものがある。自然の力を利用する発電方法といえば、水力発電が思いつくが、水力発電は巨大なダムがないと発電できない。さらに、現在水力発電として使われているダムはほとんどが劣化していて、中にはいつ壊れるかわからないものもある。そのため、現在の水力発電はずっと続けられる、という保証はない。しかし、再生可能エネルギーに含まれる発電方法として「小水力発電」というものがある。これは、川の水のわずかな流れや、家庭で使用した水を流すときに得られる水勢などを利用して発電する方法である。小水力発電ならば水力発電のような巨大な設備も不要であり、さらに家庭でも発電できるという利点がある。

このように再生可能エネルギーには太陽光発電をはじめ、小水力発電やバイオマス発電、さらには農家が育てている鶏の糞を使って発電するなど、再生可能エネルギーの幅はますます広がっていく見込みだ。

飯館村は実際に前に挙げた発電方法を全て使っている。そして何

よりも、土湯温泉町と連携して地熱発電も行っている。

飯館電力は東日本大震災後の平成二十六年にできた、まだまだ新しい電力会社である。「コメ作れぬなら電気つくる」。東日本大震災で避難を受け入れざるを得なくなった状況で、村民の小林さんが立ち上げた電力会社だった。最初は電気を送ることすら困難だった状況から、今では飯館村、土湯温泉町はもちろんのこと、再生可能エネルギーによって作り出した電気を東京まで送っている。

震災で変わり果てた村を取り戻したい、という村民一人ひとりに思いを寄せて、多額の費用をかけて発電所を作り、畑にはソーラーパネルを設置。ソーラーパネルは下で農作業ができるよう、二メートルの高さにつくった。沢山の思いを乗せて、飯館電力での発電の量はもうすぐ飯館村全世帯に行き届きそうなところまで進化している。

実際に東日本大震災の被災者である小林さんたちが始めたプロジェクトがここまで進化したのは村民それぞれの思いがあったからだと私は思う。思いと言っても、単なる気持ちだけでは収まらないような思いである。先程も言ったとおり、飯館村は震災の影響でついこの間まで避難指示が出されており、避難指示が解除されたとしてもまだまだ人は戻ってこない、という状況だった。避難により家族がバラバラになったり、震災によって家族を失ったり、被災地の人々は私たちには考えられないほどの苦労をしてきていた。地震や津波だけでなく原発の事故も起こり、それでも発電を始めた小林さんには、それぞれの被災者の思いが心の奥まで届いていたからこその支援があり、そして六年経った今少しずつではあるが元の飯館村に向けての復興が進んでいるのだと考える。

今思えば、震災当時私たちが被災者の思いを理解し、少しでも行動に移せていれば、もう少し早く復興が進んでいたのではないかと思う。当時の私たちはまだ幼稚園生だったので復興のために何ができるか、などと具体的に考えられる年齢ではなかった。だが、小学生、中学生と学年が上がっていくうちにまだ完全に復興していない

被災地のために何かできることがある、と感じていくようになった。それでも、なかなか行動には移せなかった。私はその理由を、被災地や被災者に対しての偏見だと考える。もちろん私の年齢で復興のために仲間を集め実際に被災地に行って何かをする、などということはできない。だから自分にもできることはある、と知っていても行動に移せなかったのも大きな理由の一つだ。では、私たちが十分な大人であるときにこのような震災が起こったとする。その時、私たちは本当に被災地や被災者のために何かをしてあげることはできるのだろうか。きっと、できないだろう。それは、資金的な問題以外に、やはり偏見が絡んできているからだと思う。被災者は実際に家族を亡くし精神的におかしくなっているからあまり近づかないほうがいい、何か支援物資を持って行ったとしても足りなかったとき与えられなかった人たちから怒号を浴びるかもしれない、精神的に窮地にあるから余計…さらには原発事故で東京の何倍もの放射線が飛んでいるから東北に行ったら本当に死んでしまうかもしれないetc.…想像すればするほど根拠のない考え方が溢れ出てくる。果たしてそのような偏見は復興に必要か、被災者にとって必要か、と考えると答えはもちろんノーである。実際、飯館村の避難指示は既に解除されていたし、放射線の濃度が東京よりも高かったとしてもこの村には何人も住んでいるし、住人たちが放射能で次々に命を落としている、などという情報は聞いたことがない。そして今のエネルギー資源のままでは地球温暖化はもちろん、次に原発で事故が起こった時にはもう取り返しのつかないことになる。だから新しいエネルギーである「再生可能エネルギー」を使って、復興のためにも発電を始めよう、そのような気持ちで今働いている飯館電力をはじめとする福島県、そして東北地方の人たちの思いを私たちのくだらない偏見によってどれほど傷つけてきたか。もしも今回の震災でこのような偏見やデマがなければ、どれほどスムーズに復興へ進むことができたか。震災から六年経った今、この文章を書きながら考えてしまった。

福島の発電産地ツアーという短い時間から、被災者の思い、被災地の現状、そして私たちの心ない偏見の残酷さを痛感した。

今後このような災害が起こった時、私たちがまず最初にできることは、被災地の状況を正確に把握することだと思う。SNSが物凄いスピードで変化していく今、東日本大震災当時よりもデマは回りやすく、そしてそれが原因となって災害から何年たっても偏見が続いてしまう。そんなループを防ぐのは私たちである。テレビで見ただけでは被災者の本当の思いは完全には理解できないかもしれない。だが理解しようと努力はできる。その努力が、たとえ被災地に支援に行けなくても今後の復興につながるのだと私は考える。